

—設備保全の情報共有・交流会—

東北地域保全研鑽会（2024年度第3回）

<https://info-jipm.jp/f/tohoku/>

における活動レポート

- 設備保全は、
“壊れた部品を交換するだけ”ではありません！
設備をいつでもロスなく稼働させることが本来の役割。
- でも、自社だけでは行き詰ってしまうことも。。。
困りごとの解決や、他社の取組み事例を知りたい方は、
ぜひ、本研究会で一緒に解決してみませんか！！



情報交換・ディスカッション（2024年度第3回）

東北地域保全研鑽会ってなに？

「設備保全」の業務は、「設備をいつでもロスなく稼働させる」ことが本来の役割。その実現には、故障をはじめとしたロスの原因を見つけて、未然に対策を行なうことが重要です。しかしながら、自社で得た知見だけでは、なかなか対策が難しい場合も。。。。

「東北地域保全研鑽会」では、2016年より、人材育成や人材確保、設備診断技術などをテーマにして、ディスカッションや、工場の見学を実施しながら「オール東北」での交流の場となることを目指しております。

日頃の困りごとの解決や、他社の取組み事例を知りたい方は、この機会にぜひご参加いただき、参考となる情報を自社で活かしてみませんか？
当会会員企業の方は参加無料ですので、お気軽にご参加ください



研究会概要

活動内容	・ 設備管理・保全に関する情報交換ならびに相互研鑽 ・ 設備管理、保全、モノづくり全般について先進企業の取組み紹介 ・ メンバー企業の工場見学 など
参加対象	・ 設備保全、設備管理全般の管理者およびご担当の方 ・ 人材教育の企画、実施のご担当の方
開催頻度	・ 2～3回/年を予定
年会費	・ 公益社団法人日本プラントメンテナンス協会 会員価格：無料 ・ 一般価格（上記以外）：¥33,000-/名

東北地域保全研鑽会 (2024年度第3回) における活動レポート

研究会活動の紹介 (2024年度第3回活動レポート)

テ ー マ	2024年度第3回 東北地域保全研鑽会 ～設備管理に関わる情報交換・ディスカッション～ 【テーマ】 ※ 事前アンケートにてテーマを選定 1. 設備を壊さない活動 ・保全実施方法・兆候管理活動取組など 2. 人財育成 ・社内での保全活動報告会の有無/頻度（人を育てる、褒める）など	
開 催 日	2025年 2月14日 (金)	
開 催 場 所	トヨタ自動車東日本学園 (トヨタ自動車東日本 大衡工場)	
プログラム	● 参加者より上記2テーマに関連した事例をご紹介各事例ごとに質疑応答・ディスカッション	
参 加 者	東北地域保全研鑽会 会員：22名 (8社)	

開 催 報 告	2024年度最後の東北地域保全研鑽会では、参加企業各社の取組み状況や困りごとを持ち寄り、他社からの質疑やアドバイスを含めディスカッションする機会とした。ディスカッションテーマは、開催前に参加企業にアンケートを実施し、1) 設備を壊さない活動 (保全実施方法・兆候管理活動の取組みなど) と、2) 人財育成 (社内での保全活動報告会の有無や頻度 (人を育てる・褒める機会)) の2点とした。	しかしながら、先進的な兆候管理に取り組む企業がある一方で、事後保全が主となってしまっている企業もいる。設備の各所にセンサーを取り付け、波形データを収集しているが、それを兆候管理として活用できていないという。参加者からは、はじめは事故発生時の波形データと正常時の波形データを照合しながら傾向をつかみ、徐々に兆候管理に紐づいていくというアドバイスや、企業間交流をしながら課題を一緒に取り組んでいくという支援の提案があった。
	1. 設備を壊さない活動 (保全実施方法・兆候管理活動の取組みなど) - 各社とも設備を壊さないために、技術のみに限らず、限られた時間のなかで、いかに効率的な保全活動ができるか、製造部門と協調した体制を維持できるかなどの事例が紹介された。 - 効率的な保全活動として、デジタルを活用しながら、「紙帳票の廃止」や、「保全の標準作業・統一帳票」、「保全実績のデータベース化」などの管理を一元化する取り組みを進めている。現場ごとや工場ごとで異なる管理体制を改めて、過去の故障・対応履歴の検索性を高めることで保全活動の一連の作業時間を短縮している。これは、保全部門の人員不足、人材育成の遅れ、経験不足が顕在化している現状のなかで、事故発生時の設備停止の長時間化を回避する対策として有効である。さらに、過去の保全実績により、停止時間が長い設備交換の場合は、計画的に保全活動を行うことも可能である。予備品管理にも活用可能で、必要なときに必ず在庫があるようにしながらも過剰な在庫を持たない管理が可能となる (予備品の過剰な在庫保持は、予備品の品質維持・管理に工数が必要になってしまう)。 - また、保全部門に限らず、普段使用している設備に、製造部門も愛着をもって接してほしいという意識付けのため、「自主保全活動」に取り組む事例が多い。会社ごとに取り組む方法は異なるが、デイリーで頻度よく交流したり、ウィークリーでまとめてしっかり議論するなど保全部門と製造部門が一緒になって課題を取り組むことは、人材育成ばかりでなく、部門間の相互理解を生む機会となっている。この活動が進めば、作業の重要度・頻度に応じて製造部門で対応する保全活動 (主に清掃・給油・増締め) の領域を拡大する可能性があり、設備高度化の進展により保全部門で対応すべき領域が広がっている現状において非常に有効である。さらに、製造部門の自主保全レベルを上げるために、保全部門への留学を経て技能レベルの向上を図るような取り組みを実施している事例もある。 - 兆候管理活動など進歩した保全技術の紹介として、ロボット故障が多いことから、メーカーとともに鉄粉濃度を測定して解消している。しかし、一部の故障の前兆を把握できない事例があるため、アコースティックエディションを使用。同類機器との波長を比較することで異常を検知している。将来的には、蓄積した波長をAI判定させ工数削減を目指している。	2. 人財育成 (社内での保全活動報告会の有無/頻度、人を育てる、褒めるなど) - 生産活動と並行しながらの人財育成について、各社とも工夫したり、モチベーションをあげる取り組みをしている事例が紹介された。 - 特定の専門技能教育は、外部機関での研修となるため、移動時間や、生産活動を維持するため複数人数を一度に研修に派遣できない課題があった。そのため、派遣頻度を鑑みながら、自工場内でインストラクターを育成し、教育を受けられる体制に改善したという。 - また、幹部 (社長や工場長など) と保全部門のコミュニケーション機会として保全活動の報告会を開催している企業が多い。ネガティブな報告会でなく、前向きな (未来志向の) 報告となるよう内容として、幹部から認めてもらえる、アドバイスをもらえる機会として活用されている。報告会の準備は大変であるが、その経験を通じて、報告資料の作成や、その作成過程での新たな気づきを得られることから人材育成としても有効である。 - さらに、設備の自動化・高度化が進む現在において、保全部門の魅力が足りないことへ是正する取組みも紹介された。 - 保全部門は、離職率が高さ、3Kのイメージが強い。それを払拭するため、モチベーションアップできる認定項目を定め表彰する認定制度の創立を考えている。また、保全部門とのコミュニケーションを通して、保全部門への理解を深めてもらうこともねらいとしている。現実として、しっかりした教育が不十分のなか、設備が止まったら詰められる矛盾を反省したい。海外では、保全部門は製造部門よりも給与体系が違ったりくらい尊重されているが、日本ではそのような優遇はないため、せめて、資格を取得したら手当を支給する制度を人事と相談して実現したいという。 - 今回の研鑽会では、情報交換・ディスカッションを主体とした会合としたが、保全部門の取組み紹介に留まらず、困りごとへのアドバイスがあったり、新たな企業間交流の始まりがあるなど有意義な会合であったと考えている。保全部門のポテンシャルの向上にむけ、また、東北地域の活性化につながる交流の場として次年度も開催させていただく予定である。 (記：JIPM奥富)

東北地域保全研鑽会にご興味ある方は、お気軽にお問合せください
TEL : 0120-451-466 (または03-6865-6081) E-mail : FUKYU@jipm.or.jp